

つどい

## 青森県偕行会

「忠霊塔」周辺清掃奉仕

青森県偕行会事務局長

稲村 孝司 陸自75

青森県偕行会は、8月8日、弘前市西茂森町の禅林街長勝寺敷地内に位置する「忠霊塔」周辺の清掃奉仕を、現職自衛官、隊友会と協働で行った。例年約百名の人

数で午前8時から行っていたが、今年は新型コロナウイルス感染症防止として、二手に分けて前段は午前5時半から、後段は午前8時半から行った。作業は主として刈り払い機20台により行われた。刈り取られた草、蕨類は回収車に一杯となり、鬱蒼とした藪も坊主頭の子供のように爽やかな状態になった。

今年、地元新聞社の取材があり、後日「忠霊塔周辺きれいに 会員ら草刈りに汗 弘前」のタイトルで報道された。

取材記者を塔内部に案内し、上部の納骨棚の遺骨（骨壺）や地下の戦没者遺影等を説明した。特に、青森県出身の特攻隊戦死者34名（陸軍16名、海軍18名）について、慰霊顕彰すべく特集記事をお願いした。

清掃終了後、参加者全員で大東亜戦争はじめ日露戦争、シベリア出兵、支那事変の御英霊に対し黙祷を捧げた。次いで、忠霊塔右側の陸軍墓地に供花、供酒し焼香拝礼した。

禅林街は、法華経の三十三観音に因み、曹洞宗三十三寺が配置されている非常に珍しい寺院街であり、聖なる浄土として弘前市民の深い信仰の地である。

忠霊塔は、昭和6年の満洲事変から12年の支那事変にかけて多くの軍人が亡くなられ、昭和14年には全国の市町村ごとに各一基の忠魂碑又は忠霊塔が建設された。弘前市においても同年、忠霊顕彰会

が設立され、忠霊塔の建設地を同市で最も由緒ある長勝寺に定め、陸軍墓地を街外れから遷して建設準備に入った。

工事は、昭和16年5月から始まったが、工事開始後間もなく大東亜戦争が始まり、建設資材が不足して、完成は終戦後の昭和20年11月となった。



陸軍墓地正面

終戦時、忠霊塔には戦死者2万余柱が祀られ、その中の2500体のご遺骨が確認されていた。GHQの占領政策で、弘前市に進駐してきた米軍第82師団隷下の第322歩兵連隊は、忠霊塔の存在を絶対に認めず、破壊を予定していた。

長勝寺住職始め関係者は、破壊を免れるため、忠霊塔の「忠」の文字を梵字で覆い、「霊塔」とし、昭和23年には、仏舍利（釈迦のお骨）の分与を受け、「仏舍利塔」に改名した。

昭和58年、日本海中部地震で「仏舍利塔」も大きく破損し、同年「忠霊塔」に名称が戻された。